

ドイツ的景観に示めされた再生と継続の思想

藤 本 武

新潟青陵大学福祉心理学科

(英)The Thoughts of the Reconstruction and
the Continuation in the German Landscape
(独)Die Gedanken von der Wiederaufstehung und
der Kontinuität in der deutschen Landschaft

Takeshi FUJIMOTO

NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY
DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY

Abstract

In diesem Beitrag wird es 1. und 2. Kapitel erläutert, daß Forst als die heutige deutsche Landschaft, die erst seit dem Mittel des 18. Jahrhunderts auf den Gedanken von der Wiederaufstehung und von der Kontinuität gebaut ist, das natürliche Kulturerbe sein soll, daß diese Gedanken im 18. Jahrhundert den germanischen Urwald in "Germania" von Tacitus als ihr Ideal von von Carlowitz und seine Nachfolgern gegründet wurden, und daß hauptsächlich Klopstock und von Kleist im 19. Jahrhundert den auf die Befreiung des Vaterlands und die moderne Freiheit zielenden deutschen Leute diese Gedanken beeindruckten und tief entwickelten.

Dann wird es im Ende des 2. Kapitels, 3. Kapitel und 4. Kapitel beweist, damit diese Gedanken bis zur unseren Zeit noch in Deutschland nochfolgt sind. es folgt:

1. Fall. der Bericht für den Erhalt der deutschen Wälder gegen des Englischen Projektes 1946~47.
2. Fall. Die Bemühungen zum Schutz eines stadtnahen Waldes, Reichswaldes bei Nürnberg, 1970er.
3. Fall. Die Erhaltung des Waldes im Wackersdorf 1980er.

Key Words

The German Landscape, The Wood as the Nature,
The Thoughts of the Reconstruction and the Continuation, Reichswald bei Nürnberg

要 旨

今日のドイツ的景観は再生と継続の思想に基づき18世紀中葉以後初めて設置された自然的文化遺産であり、自然の森再生と継続の思想は、先駆者シュトロマイヤーを受けて、18世紀カロヴィツと後継者たちによって、タキトウスの「ゲルマニアの森」再生を理念として基礎づけられ、19世紀ロマン派のクロプシュトックとクライストラが中心となり、この思想を祖国解放と近代的自由を目指すドイツ市民に訴え、深化発展させた思想形成の過程を第一章と第二章において論証する。

この思想が現今に至るまでドイツ社会に継承されてきたことの証明を、第二次大戦直後1946年占領国イギリスのドイツ森林伐採計画に対する1947年のドイツとドイツ市民による森林保護答申、市民参加型社会による1970年代のニュールンベルク・ライヒスヴァルト保存運動と1980年代のヴァッカーズドルフの森保護全国運動の三つのケースを、第二章後半、第三章と第四章に挙げて検証する。

キーワード

ドイツ的景観, 自然としての森, 再生と継続の思想, ライヒスヴァルト

1. ドイツ的景観における再生原理

1-1 カロヴィッツによるゲルマンの森再興論

18世紀初頭の1713年、後世の300年にわたり影響を与えた著書『シルヴィカルトウーラ・エコノミカ（経済的森再生）』が出版された。著書ハンス・カール・フォン・カロヴィッツ（1645年～1714年）は、イェナ大学で法学を学び、1669年ザクセン公国の職務に就き、最終的にはエルツ地方鉱山長官であった。彼の時代は、1618年に始まった三十年戦争がドイツを戦場にしてヨーロッパの烈強、神聖ローマ皇帝王朝ハプスブルク家、その同盟国スペイン、強力な力を有するフランスとイギリス、北歐の大国スウェーデンによっておこなわれ、1648年に終結したが、ドイツ国土は森を含めて荒廃に瀕していた。例えば、1618年のニュールンベルクは人口4万人であったが、戦争終結の1648年には1万人に減少していた。戦争は三十年戦争にとどまらなかった。プフルツ戦争等絶えなかった。これらの戦争によってヨーロッパの森は乱伐に次ぐ乱伐を蒙り、加えて産業社会の木材需要も増大し、ヨーロッパの原生林は殆んどこの時代に伐採され尽くした。ドイツでは最奥地の原生林さえ全て消滅した。

カロヴィッツはドイツの森の現状を受けて、その著書の中で、伐採された原生林跡地への低樹高林の採用、針葉樹植林、外国樹種の導入、による森の再興を、森林管理と森林経営の経験に基づき述べ、森の倫理的意義や森の美的価値、森の公益的有用性、自然景観としての森の位置づけを文献資料と自然科学に関する知識を用いて論述した。その際、彼の功績は文献資料としてタキトウスの『ゲルマニア』を用いたことにある。^{注1}

タキトウスの『ゲルマニア』はルネッサンス時代以来、中央ヨーロッパに関する最古の歴史的資料の一つとしてヨーロッパ中に周知であったにも拘らず、しかしながら『ゲルマニア』を熟読したのは恐らくカロヴィッツが最初の人であったと考えられる。彼が『ゲルマニア』に描写された「（ゲルマンの森は）広大で恐怖を覚えるような物凄い森」を彼の著

書に引用して、初めて『ゲルマニア』が多くの人に読まれるようになったからである。

彼の第二の功績は、森を再興する根拠としてタキトウスの古代ゲルマンの森を理念的に使用したことである。今日の観点よりすれば古代ゲルマンの森は、すでにケルト人やゲルマン人の干渉を受けることにより、すでに文明化された森であったことは明瞭であるが、^{注3}タキトウスは古代ゲルマンの森を全く手つかずの自然のままの原生林と誤解していた。カロヴィッツもタキトウスの『ゲルマニア』を第一級の文献資料として何の疑念もなく、その森をタキトウスに従って、ゲルマンの自然そのままの原生林であると見ているが、彼は現在は荒廃したドイツの原野にかつてゲルマンの森という理想像が実在したという幻想をドイツの人々に植えつけるのに成功した。

彼の最後のそして最大の功績は、森の再生という理念を構築し、それをドイツの人々に普及させたことである。この理念こそその後300年に渡り継承されていったものである。

18世紀のヨーロッパの中心思想はタキトウスの『ゲルマニア』に対して、カロヴィッツと全く異なる別の視点から関心を抱いていた。それはタキトウスが描写した古代ゲルマンの森に住むゲルマン人の在り方への関心であった。デカルトの近代理性は理性の荷い手である「我」の自由獲得へとその視点を集中していた。フランスのモラリスト・モンテスキュー（1689年～1755年）^{注4}は『ゲルマニア』の熟読により、中央ヨーロッパの森に古代ローマ帝国の支配に属さない自由人が存在した。この自由人はローマ帝国に対抗する勢力と自由を獲得していた、と述べて、1789年のフランス革命に重大な理念的影響を与えた。ヨーロッパ思想の主流であったフランスは『ゲルマニア』から人間の自由と独立を読みとったが、ゲルマンの森そのものについてはドイツ程強い関心を抱かなかつた。^{注5}

フランスやイギリスと異なりドイツは未だ中央集権国家を建設しえず、ヨーロッパの二大勢力フランスとハプスブルク家の圧迫を直接受け、神聖ローマ帝国はドイツをその領域としていて、大小数多くの領邦君主国家群に留まり、ドイツ人の多くは政治的関心を抱く

ことを許される状況になかった。そのような「我」は内面的に沈潜するしか外に道はなかったからであろう。現実に自己実現を果たしえないドイツの「我」は、現実から遠く離れた太古のうっそうとした森を理想的祖国とすることによって、現実に果たしえない「我」の自由を、「我」の内的自由の形で獲得しようと試みざるをえなかったと言える。太古のゲルマンの森を理想的祖国として徹底的に受容すれば、この理想的祖国の再興はドイツの「我」にとり必然であった。カロヴィツの後継者たちの殆んども、森設置に必要な植林を常にタキトウスのゲルマニアの森を根拠にしている。ドイツの広範囲でタキトウスの『ゲルマニア』が熟読され、現実には存在しない理想的領域的存在であるゲルマンの太古の森再興がドイツの人々の共通理念として形成されていった。

1-2 ドイツ的自然景観の再生

一般的にドイツでは森をヴァルトまたはフォルストと呼ぶ。古代から中世にかけてヴァルトの森は自然の原生林を意味し、フォルストの森は自然の原生林が皇帝、王、族長、領邦諸侯などによって、狩猟用又は特別な地域として管理された森を意味していた。中世中期頃より近世にかけて、ヴァルトの森は漸次フォルストの森へと変遷していった。近世になると、最深の奥地にある原生林さえ伐採されるようになり、本来の意味でヴァルトと称された原生林はドイツだけでなく、ヨーロッパ全体にも殆んど消滅した。これにより森が生命体として自然発生的に自己再生を続けて森を新しく形成するか、さもなければ人為的方法によって新しく森を再生するかのどちらかでなければ、森の存続はありえなくなった。だが森が生命体として森を自己形成するよう森にその権利を委ねるには人類は相応しくなかった。人類の歴史はそのことを証明している。近世になればなる程人類は森への干渉の度合を様々な理由で深めてきた。森の自己再生力に森を委ねるゆとりは人類にはなかった。せいぜい人類の干渉と森の自己再生力との協同を認めるのが精一杯であった。従ってドイツも含めて18世紀以後のヨーロッパの領域的存

在である森は全て、人為的に植林され、森の自然再生力により、森へと形成され、形成された森が人為的に管理された森である。このような森をフォルストの森と称するようになった。名称上はヴァルトを冠していても、フォルストの森であることには変わりがなくなった。近世では裸地や荒地に植林することによって森を設置することをもフォルスト化と呼んでいる。

1702年の勅令「フォルストオールドヌンク（森林法）」の中に、「農民はオーク樹とブナ樹を伐採した場合、伐採樹各一本毎に同一樹種6本の苗木を育成しなければならない。苗木が若樹に成長したら、それらの若樹を森に植林しなければならない」という規定が見られる。

フォルストの森再生に際して、当時放牧家畜や野生動物から苗木を守るため、それらの進入を阻止する柵などで囲まれた区域を設置した。この区域は、オーク樹種苗場、樹木園、種苗栽培園の原型となった。囲われた区域でオーク又はブナの実から幼樹が育成され、生育した幼樹又は若樹は、森、領邦国内の各地域各場所、道路沿い、荒地や裸地、家屋の前、あるいは庭園、へと移植されるのがフォルスト設置の方法であった。

18世紀全般を通してドイツではこのフォルスト化が幾度も奨励され励行されていた。プロイセンのフリードリッヒ大王（1712年～1786年、在位1740年～86年）は、国民に植樹を奨励し、自身も積極的に模範を示した。ある時大王は家臣たちに向かって「松笠の正しい種播方法を知っているか」と尋ねたと、J. W. L. グライムは記述している。ある地方では結婚式や子供誕生の折に植樹を行う慣習が定着した。¹¹⁶

ザクセン国のアウグスト強力侯を代表に数多くの領邦諸侯が植物養樹園を設置し、そこで育成した幼樹を自国領内の舗装街道に沿って植樹をおこない、並木の形成に貢献した。街道を舗装することは絶対主義時代の理想であった。舗装街道は領邦諸侯の居城と領内各地を結びつける重要な交通網であった。中世から近世初期の街道は乗用箱型馬車の通行に

よりしばしば100m以上の道幅となった。未舗装道路は馬車の輪だち跡がぬかるみになり通行不能になるため、各馬車は輪だちのない場所を走ることであり、幾らでも道幅は拡張していったのである。舗装道路は、通行者や通行馬車が道路から逸れることを阻止するため、道脇左右に水溝が設置されていた。並木は樹根が道路の水分を吸収し、樹木が暑さ寒さ、嵐や吹雪から通行者を保護する目的で設置されたと同時に街道景観に美的価値を付与するものであった。

1-3 ロマン派による聖森聖樹再興論

状況が変化したのは18世紀中葉以後であった。タキトウスの森そのものへの関心が、かつてのフランス同様森に住む人間存在への関心を惹起した。

1767年フリードリッヒ・ゴットリープ・クロプシュトック (1724年~1805年) は、^{11.7} 頌詩『丘陵と聖森、叙情詩人、詩人と吟遊詩人』を発表した。この頌詩の内容を要約すると、古代ギリシャの叙情詩人、ノルド語を語る太古北欧出身の中世吟遊詩人、そして現在の詩人の三者が登場する。吟遊詩人は古代ゲルマン部族ヘルミノーン族に語りかける、^{11.8} 「かつて私は数千年を経たオークの巨木の下を逍遙した。今また年を経たオークの後裔樹下を私は吟遊する」と。父祖の国の吟遊詩人は叙情詩人に近づき、尋ねる。「汝は何を我が父祖に与えたのか」と。叙情詩人は「今なお栄光に満ちた月桂樹の冠をギリシャ人へ、聖なる森に立つオークの樹冠を汝の父祖へ」と答える。詩人が「聖なるチュートンの森」に目をむけると、叙情詩人がリラを立てかけた月桂樹の傍を通り過ぎた。吟遊詩人は立てかけられたリラを月桂樹から拾い上げオークの若樹に差しかける。風がリラに吹き寄せ、リラの琴線がひとりでに奏でる、「おお我が祖国よ」と。クロプシュトックがオークの聖なるゲルマンの森を祖国へと結びつけたこの頌詩は同時代人に絶大な効果を与えた。祖国解放を切望する若者たちにとり、古代ゲルマンの聖森への憧憬は自由への熱烈な憧憬となった。^{11.9}

クロプシュトックはあらゆる機会にオーク樹を詠った。1769年の詩『ヘルマンの戦い』

において、祖国を「深遠なる聖苑に鎮座するいとも重厚にしていとも緑陰に富む櫟、最高至高にして至聖なる最古の櫟」と歌い、1774年に「櫟（オーク）は我々の父祖にとり象徴を越えた何者かであった。櫟は聖別の樹、緑陰は神々最愛の場、依り代であった」と書いた。

この櫟の森に結びついた祖国解放の英雄ヘルマンを登場させたのはクロプシュトックが最初であった。アウグストゥス皇帝およびティリウス皇帝時代の紀元後9年ドイツ西北部トイトブルクにおける会戦でヴァルスのローマ軍団を破り、祖国を解放したとタキトウスが伝えているゲルマン首長ヘルマンを主題とする三連作をクロプシュトックは1776年から執筆し始めた。^{11.10}^{11.11}

クロプシュトックは先にオークの聖なる森を祖国と結びつけた。そして今、聖なるオーク樹を媒介として父祖の国と森の人ヘルマンが結びつけられ、祖国と自由のために剛勇を持って戦う英雄ヘルマンに焦点が当てられることになった。

クロプシュトックと同じ主題を30年後に取り上げたのは作家ハインリッヒ・フォン・クライスト (1777年~1811年) である。^{11.12} 1808年その著書『ヘルマンの戦い』の中で、「ヘルマンはヴェーダンの櫟（オーク）の樹陰の下で死ぬのだ」と書いて、ヘルマンとオーク樹の固い結びつきを強調している。1810年には、後期ロマン派詩人ヨーゼフ・フォン・アイヒェンドルフ (1788年~1857年) がヘルマンに率いられたゲルマン民族のヒエルカー族を主題にした。フリートリッヒ・デラ・モッテ・フーケは1808年その著『北国の英雄』の中で、ジークフリート・サガを取り上げ、ゲルマンの森から新しい人物を描き上げた。^{11.13} これらの登場人物は全て祖国解放の英雄たちであった。^{11.14} 19世紀初頭、組織的に森の伝承を収集し、童話の形で発表したり、雑誌を出版し、その中で古いドイツの森とドイツの人々が考えたゲルマンの森に関する初期情報を選び集めたグルム兄弟は森に住む人間存在の情報^{11.15}を収集した典型であった。ヘルマンや森に隠くれ住む盗賊のような森の人が叙事詩や作

品の主要人物となったのであった。

ロマン派の詩や作品に刺激され、1772年、シュトルベルク伯、ボス、フォス、ヘルティエなどの若き詩人たちを含むゲッティンゲン大学の学生たちがゲッティンゲン近郊のヴェントにあるオーク樹林に集結し、ゲッティンゲン詩人盟約またはゲッティンゲン聖森盟約を創設した。このヴェントの森は下枝が横に広く拡張した枝を持つオーク樹が点在する放置されたかつての放牧林であった^{it.16}。祖国解放は前述した如く、オーク樹と関連されているが、この時代になると「ドイツオーク樹」が祖国と関連した概念とされていった。

1-4 廃棄物オーク樹のドイツ的再生

古代ゲルマン民族は聖樹信仰を持ち、聖森の巨大なオーク樹は宗教儀式の中核であった。オーク樹のある周囲の開けた場所は神聖な聖域であり、そこに人々は集合し、そこで裁判をおこなった。古代においてボダイ樹も同様に聖樹とされ、そこに聖なる空間が設けられ、そこで部族の民会が開催された^{it.17}。しかし古代ゲルマンの聖森にあったオーク樹は、中央ヨーロッパへキリスト教が伝道された時、聖人ボニファティウスにより北欧神トール神の聖樹である故に切り倒されたという伝承はドイツにおいて周知のことである。

18世紀になると殆んど古いボダイ樹は伐採されて最早存在しなかった。一方オーク樹は、中世以来の森林内放牧の際に、その実が家畜の飼料であることと建築用材として貴重であることから保護されてきた。中世以来延々と家畜が放牧され、家畜に食い尽くされてきた森に孤立して点在する風変わりなオーク樹を、18世紀になって突然に、自然の象徴として崇拜することは極めて奇妙なことであった。それにこれらの点在するオーク樹は自然生育の樹木ではなかった。放牧家畜の飼料を得るために、養樹地から放牧林に人工的に移植されたものであった。そのようにして形成されてきた放牧林が18世紀になると、放牧が森林内で営まれるのではなく、牧草地又は放牧草地が囲われた場所に設置されるという農業形

態の変化により、放牧林が不要になり放置されることになった。そこからはっきりと区別された森林地、放牧草地、農耕地そして村落というドイツ的自然景観が確立され始めた。放牧林のオーク樹が全く価値を失わない、オーク樹を特別に保護する動機が全く存在しなくなった時代であった。

将にこの瞬間に、ドイツの人々はオーク樹の神話的価値を再発見したのである。放置され、無価値となったガラクタ廃棄物のオーク樹が、ゲルマンの聖域なる森の聖樹、年を経し老木、数千年継承されてきた大自然の象徴となった。聖樹へと上昇した廃棄物オーク樹は自由と剛勇の父祖そのものへと変身し、オーク樹下に集うことは、祖国と共にあるという至福の聖なる時、精神高揚の時とされたのである。ここにドイツ特有の再生思想が現れている。この再生思想は以下のように、オーク樹に更に新しい価値を与えていった。

1789年フランス革命時代フランスではオーク樹が「自由の樹」として植樹され、その数は1792年には6万本の「自由の樹」が植樹された。当時フランスの影響を強く受けていたドイツ西部のプファルツ州とヴェストファーレン州でもオーク樹は「自由の樹」として植林された^{it.18}。この「自由の樹」オークはドイツにおいては全く新しい別の意味を獲得した。「ドイツオーク樹」が祖国解放と連合した概念として特殊化されていった。ナポレオンがヨーロッパを傘下に掌握した時代にドイツオークはフランスへの抵抗の象徴へと再び変身した。

1813年10月ライプツィヒ近郊でフランス軍とプロイセン・オーストリア・ロシア連合軍との間でライプツィヒ諸国民戦争がおこなわれ、フランス・ナポレオンの軍団は破れ、ナポレオン軍の欧州支配の夢が破綻した。戦勝国プロイセン王フリードリッヒ・ヴィルヘルムI世(1797年~1888年)は同年に戦勝栄誉章を創設し、オークの葉を祖国の象徴として使用した。ドイツ軍全階級に設定された栄誉勲章はオーク樹葉で飾られた鉄十字特別栄誉章であった。それ以後、オークは「ドイツ人の樹」となった。

この会戦の直前、フランス軍によって全滅させられたドイツ義勇軍があった。その義勇軍に参戦し戦死した若き詩人テオドル・ケルナー（1791年～1813年）は死の直前、「闇の森を彷徨するは何者ぞ、山を經めぐる者は何者ぞ。リュッゾーウの死者の霊、自由奔放な森人なり」と人口に膾炙された有名な詩を書いた。¹⁸

画家D. F. カスパーの初期の作品は希望に満ちたオーク樹が描かれ、晩年の作品は枯れたオーク樹が数多く描写されている。カスパーは生涯オーク樹のみを描き続け、描かれた全てのオーク樹は一貫して天に向かって聳え立つ「英雄的オーク樹」であった。カスパーが1813年から14年にかけてゲルマンの太古からの原生林として描がいた「森の中のオーク樹」はフランス国境に近いオークの森がモデルとされているが、この森もゲルマンの原生林ではなく、人為的に植林されたオーク樹のフォルストであった。

1817年のワルトブルク祭の時に、1832年のハムバッハ祭の時に、1848年の三月革命の際に、黒赤金の三色旗とオーク樹が祖国の象徴として使用された。1871年ドイツ国会設立の時に、1913年解放戦勝記念祭の時に、皇帝ウィルヘルム I 世即位25周年記念祝祭の時に、常に数多くのオーク樹が植樹された。¹⁹ それらの結果今日もオーク樹は都市や村落の中心に存在している。このようにオーク樹はドイツ的理念の象徴としての、森再生の理念的象徴としての意義を獲得していった。しかし現実の森再生の際、一般的にはオーク樹は選ばれず、現実に適合した針葉樹が選定された。ニュールンベルクにおける最初の針葉樹種播以来すでに数百年針葉樹種散布が森林再生に最良の効果をもたらすと経験的に知られてきたのである。

森の再生は19世紀初頭のドイツ帝国創立に至る過程の中で重要な役割を果たしてきた。森の再生植樹はフランスなどへの抵抗手段でもあった。「体操の父」であり解放運動の精神的指導者の一人F. L. セーン（1778年～1852年）はフランス国境に通行不能な森を構築することを提案した。これは比較的平垣で

あるヨーロッパでは有史以来森が境界の目印とされてきたことからの発想である、と思われる。この提案は後年の1938年フランスのマジノ線への対抗措置としてドイツ西部国境にいわゆる西部要塞線ジークフリート線という型で実現された。森再生の理念はドイツ帝国創立後も継承されていった。

2 ドイツ的景観における継続原理

2-1 領域的存在への人為的経済的干渉に対抗する継続原理の発生

18世紀の産業社会は熱源としての木材を多量に必要としていた。この産業社会の要請に応えるべくカロヴィツとその後継者たちはその条件を充足させるためにフォルストの森を再生させ、再生されたフォルストの継続を不可欠と見るに至った。カロヴィツとその後継者たちは後世に多大の影響を与えた森林持続性原則を森に導入した最初の人たちとなった。この継続原理はそれ以後の数百年間にわたるドイツ林学の信条になっただけでなく、自然保護の分野にも適用され、今日の環境・景観に至る広範囲の分野で継承されている。森の持続性原則は最初純粋に経済活動として発足したが、古代ゲルマンの聖林再生と関連することにより、森林の継続原理として命題化され、後には森林の継続原理に経済的意義が附加されるようにさえ変遷していった。しかしそれは後年であり、18世紀当初は依然森は領邦諸侯にとり領国内の製塩所や精練所の燃料材を提供する場であり、木材の売却は重要な財源であった。とりわけドイツ南部山岳地帯には未だ豊富な針葉樹林地帯が広がっていた。そこで収益性を上昇させるため、領邦諸侯は森林を継続的に経営管理する専門教育を受けた森林官を必要とした。

クロプシュトックが森の詩を詠み、オーク聖森同盟が発足したと同時期に、森林専門教育機関が最初に設置された。それはH. D. フォン・ツァンティエールがハルツ地方のヴェルニヒローデに開校した世界最初の林業専門学校である。²⁰ 1770年には林学アカデミーがベルリンに創立された。1780年初めてゲッティンゲン大学で哲学教授ベックマンが林学

の講義を行った。^{註21} 林学専門教育は発足当初から専門課程の幅広い規範が整備されていて、初期の林学教科書の一つを出版したハインリッヒ・コッタ^{註22}（1763年～1844年）は森の学問の任務を「要求に対する最適かつ最大の利用が、最小の費用支出によって持続的に得られるように森を経済的に管理することである」と述べている。この表現では、森林経営における持続性原理が、経済的面による木材の生産にのみ限定されているが、彼は他の箇所において、森林保護、森林の景観維持を含めた森林の継続性を根底にすべきであるとしている。^{註23}

森は多かれ少なかれ人類出現以来今日に至るまで様々な理由により人間の干渉を受けてきた。この時代も変わらず森はフォルストという人間の干渉を、経済活動という人間の干渉を受けることになる。そこで問題になったのはフォルストという領域的存在の法的定義であった。林学者F. フォン・ブルグスドルフは1788年「樹木成長に全面的に使用された原野」と森を定義した。森とは単に樹木が存在している原野だけでなく、継続原理に基づき、樹木成長のために専有的に将来も提供される原野でもある、というのである。この森の定義は、継続原理を考慮した理論的見事な定義である。最早や原生林が一切存在せず、現在樹木が一切存在しなくても、人為的にフォルストを形成することによって再び森が出現し、そのフォルストの樹木が育成された原野は継続的森林となる。これによって森が法的に規定され、地図上では森記号で樹木予定地も全て示めされることになった。従って地図で示めされる森面積総体と現実の森面積総体が一致することは絶対にない。

個々のフォルストが設置される場合、その土地固有樹種、世界の様々な樹種が検討され現実にはオーク樹種ではなく、多くの場合、針葉樹、とりわけトウヒ（モミ）樹種が選ばれた。トウヒ樹選出の理由は、木材が高価であり、短期間に生育し多量の産出が可能であることに加えて、産地から消費地への輸送手段である「いかに流し」に針葉樹は最適であったことによる。更に地味の乏しい地、砂地にさえよく成育したという第三の利点もあった

が、但しこの場合トウヒ（モミ）よりドイツ松の方がより適応したため、しばしばそのような土地では松が選ばれることがあった。

トウヒ（モミ）の植林は特にプロイセン王国で盛んに行われた。すでにプロイセンには殆んど自生のトウヒは存在しなかった。ドイツではシュレジアとハルツ山岳地帯にのみ自生のトウヒが存在していた。1815年のウィーン会議以後、プロイセンでは積極的にトウヒのフォルストが多数設置され、トウヒは「プロイセンの樹」となった。その植樹方法はプロイセン軍隊に模して、樹列は整然と並べられ、密集して植樹された。そのため成長した若樹は間伐を必要とした。フォルストの森から間伐された若樹で姿の美しいものはクリスマス・ツリーとして使用されるようになり、いつの間にかモミの木はドイツないしプロイセンのクリスマスに不可欠のものとして定着した。それ以前ヨーロッパではクリスマスの飾りとしてセイヨウヒイラギやヤドリギのような常緑樹が使用されていた。^{註24} イギリスでは特にヤドリギが多かった。ヨーロッパ西部地帯ではトウヒを本質的に植樹しなかったので、今日でもクリスマスの緑はセイヨウヒイラギかヤドリギである。

2-2 領域的存在の景観的意義

フォルストの森は、純粋に人為的形成物であるにも拘らず、極めて短期間を経て、あたかも自然の森の様相を帯びるようになる。人々にとって森がどのような方法で形成されたかが問題ではなく、昔も今も森は自然そのものであるべきであった。そこでフォルスト設置の際、景観的観点から可能な限り美的形態を考慮するという理念が浮上した。山林局長官であったH・ブルックハートは1855年その著『フォルスト再生における種播と植樹、樹木育成に関する論』の中で、単一樹種によって構成された森に美的価値を置き、森は景観を彩る最高の装飾品である、と述べている。更に「我々の父祖の生けるモニュメントである森は、かつての聖森信仰は遠い過去に喪失し、現金収入の単なる財源という新しい価値を獲得はしたが、だがそれでも今尚、威風堂々の

モニュメントである森は、都会の喧噪を逃れて森を訪れる者に、静謐な安穩と精神の高揚と孤独への深い沈潜とを豊かに与える」と記述している¹¹²⁵。

フォルスト設置の際、森外周部樹木は外部からの見映えをよくするために「親しみ易い広葉樹」で構成し、枝打ちをしてはならない。森の中の道路には「好ましい湾曲」を持たせ、森への訪問者の目に留まり易い場所には美しい樹木を配置させ、森全体にコントラストをつけるようにする。遺跡、廃墟や岩壁から樹木という装飾を決して奪ってはならない。森を伐採する際にも、山頂、丘陵、十字路、泉のほりと、湖沼畔、その他特別な場所には遠くから見渡すことのできる目印として、必ず不変不倒の巨木を残す。これらはブルクハルトの見解であるが、このような森の景観的価値を評価する者はひとりブルクハルトにとどまらず、多くのドイツ人が共感する所のものであった。1885年ハインリッヒ・フォン・ザーリッシュがこのような見解を纏めて森林美学の教科書を出版した。この著書は初版以来二十世紀に至るまで幾版も重版された¹¹²⁶。19世紀にフォルストの森は文化的意味と景観的価値を新たに獲得していった。

フォルスト設置にも拘らず、19世紀中葉に至るまでドイツの森は総体的に悪化したままであった。その理由は産業革命による工業化に大量の熱源が依然として木材に依存している、木材需要は益々増大していたことにある。その結果森継続原理は殆んど達成されず理念的命題にとどまらざるをえなかった。しかし19世紀中葉になると、経済活動による森環境破壊が全く予期しない方法で弱体化していった。それは、第一に産業構造の変化と、第二に、より決定的に、工業化社会のエネルギー源の変化、によるものであった。

第一に、羊毛産業が綿花又は合成繊維の採用により衰退したことである。これにより羊飼育は経済的魅力を喪失し、数多くの放牧林が放置されるようになった。放置された「荒地」は森へと植林された。例えば、アイフェル、ザウアーラントとリューネブルク・ハイデなどに於いてであった。ザウアーラント郡のメェシェーデには19世紀前半に2万頭から

3万頭の羊がいたが、1913年には1万頭以下の数となり、その後年々減少した¹¹²⁷。

だがより決定的なのは、工業化における蒸気機関導入によるエネルギー源の変化であった。木材と木炭から化石石炭への転換であった。森への経済活動による抑圧が至る所でただちに喪失したわけではないが、全国的に各地方へ鉄道網が確保された時に、石炭と無機質肥料が鉄道網によって輸送されることが可能となり、森環境を破壊する経済的圧迫は弱まっていった。1856年以後、鉄鉱石から粗鉄生産のためのエネルギーは90%以上がコークス燃料となった。その結果森の過剰利用が鎮静化されていった。

工業化社会のエネルギー源変化は、森への過剰利用と同様、森の荒廃をもたらした。森林原野は放置され裸地・荒地となった。これらの多数の原野に対する対処方法はヨーロッパ諸国の中で際立ってドイツが異色であった。ドイツはこれらの原野に植林による新しいフォルストの森を設置する道を選んだ。他のヨーロッパ諸国がその道を選ばなかったにも拘らず、何故ドイツだけがフォルストの森を形成しえたのかは、基本的には森再生と森継続原理への国民的合意がすでに18世紀に形成されていたことによる、と考えられる。

1864年ドイツ北部リューネブルク管区の森林原野総数は17万haであった。1939年の森林原野総数は35万2千haと2倍に増加している。ドイツ総体では森林原野が1850年頃より顕著に増大していった¹¹²⁸。

若し18世紀とりわけ19世紀に森再生と継続の理念とその理念への神話的根拠づけが形成されていなかったならば、産業社会が森を以前の時代よりも必要とせず、木材が産業社会の各方面で求められなくなった時、他のヨーロッパ諸国と同様に、森を人間性の根拠として称揚することはなかったであろう。森が燃料材源としてのみ意味づけられていれば、シュヴァルツバルト特産のカッコウ時計¹¹²⁹、バイエルン山地の木彫芸術、アルプス山地の木工細工、ヴァイオリ製作産業などは、今日のように発達することはなかったであろう。これらは全て、この時期に始まった。

2-3 戦争直後、占領国によるドイツ森伐採計画に対するドイツの答申に示めされた継続原理

この継続理念は継承されていった。第二次大戦後、占領国イギリスはドイツの森伐採をドイツに諮問した。1946年及び1947年ドイツ山林局及びドイツ林学者たちは、森林の土壌保持性、洪水抑制力、河川への均一な水量放出による河川水量均一化、水力発電、ダムへの森の必要性、湖沼への軟泥流入への阻止力、山岳地帯の雪崩、土石流のための保安林、気象の安定化、森が人間に与える数多くの精神的慰め、などの森林保護の理由を列挙して、ドイツの森をイギリスのように除去するならば、中央ヨーロッパにおける近代工業化の基盤であるインフラストラクチャー建設は極めて困難な状況に陥ちいるであろう、と答申した。³⁰ これはイデオロギーとは無縁な理念であって、第二次大戦終了直後のカオスの只中で、明日の衣食住さえ確保しえない状況にありながら、森再生と継続原理を明確な形で集約しえたことは、それ以前の第三帝国時代の抑圧の中でも、森継続、森再生の理念が生き³¹ 続けていたことを証明していた、と言える。

この継続性を次にニュールンベルクのライヒスヴァルトに検証する。

3 ニュールンベルクのライヒスヴァルト——都市近郊型帝国森に見る継続原理による自然景観論

3-1 ニュールンベルクライヒスヴァルトの位置と歴史

ドイツ中南部フランケン地方最大都市ニュールンベルク近郊、ペグニツ川とジュラ山脈、シュワーバハとシュヴァルツアに囲まれた地域にニュールンベルクライヒスヴァルト（ニュールンベルク帝国森）は設定された。8世紀フランク族が本拠地ライン・モーゼル川沿に軍を東へと遠征させ侵入、フランクフルトからニュールンベルクへ向かう道路に沿って、所有者のいない広大な土地を、征服者の権利に従って、数多く帝国領地とした際に、ニュールンベルクライヒスヴァルトも帝国領狩猟森林として占拠され、設定された。

これより、ニュールンベルクライヒスヴァルトの歴史は、主にシュペルバー著『ライヒスヴァルト バイ ニュールンベルク（ニュールンベルク近郊帝国森）』³²を参考に論述し、その森林面積推移などの統計資料はバイエルン州アルトドルフ営林署から提供された資料に従って記述するものである。1999年夏、ニュールンベルクのライヒスヴァルトとアルトドルフ営林署³³を訪問した際、その著書と統計資料を営林署の好意により入手したものであり、この場を借りて感謝の意を表するものである。

ニュールンベルクのライヒスヴァルト（これよりライヒスヴァルトと略する）は『帝国の蜜蜂園』と古文書に記されていて、この森の内とその周辺に27の養蜂村落と92の養蜂園があった。神聖ローマ皇帝がライヒスヴァルトの養蜂の直接的封建君主であった。13世紀中葉帝国シュタウファー王朝時代に皇帝の封臣ニュールンベルク城伯にライヒスヴァルトの利用権が譲渡され、中世の第一期大開墾時代にバンベルク側の部分がニンニク畑として開墾された。ライヒスヴァルトは1266年ペグニツ川右岸側をローレンツ・ライヒスヴァルト、1427年左岸側をゼヴァルドウス・ライヒスヴァルトと呼ばれるようになるが、城伯はこの帝国森を財源として利用し、中世時代最も繁栄した手工業都市ニュールンベルクは手工業産業の熱源と増大する人口の薪材を莫大に必要とし、ライヒスヴァルトは過剰利用され荒廃していった。そこで1294年ライヒスヴァルトに関する最古のヴァルトオールドヌク（森法度）が制定され、森林保護を含む森林経営の基本が示めされた。それにも拘らず、ニュールンベルク市の手工業産業は発展し、それに伴い都市人口は増大し、益々木材需要は拡大することにより、ライヒスヴァルトは危機的状況に陥ちいった。

3-2 世界最初の種播による森の継続

ライヒスヴァルトの危機的状況に直面して、1368年ニュールンベルク市参事豪商であったペーター・シュトロマイヤーはローレンツ・ライヒスヴァルトのリヒテンホーフ近郊で針葉樹の種播による植樹を実施した。これは文献に残された世界最古の植樹法発明であり、

木材を継続的に市場に提案し、森林の荒廃を阻止する目的に沿うものであった。その後シュトロマイヤーはドイツ各地でこの種播方法を広め、中央ヨーロッパ中にこの方法は普及した。今日尚630余年の歴史を数える企期的植林であった。これにより、ライヒスヴァルトは設定された当初はその植生において広葉樹を主体とした混交原生林であったが、次第に高収益を約束する針葉樹が増え、中世末期になると針葉樹と広葉樹の混交樹林へと変遷していった。

この間、ニュールンベルク城伯は皇帝からライヒスヴァルトの全ての権利を経済的理由で譲渡されたが、最終的には1427年帝国自由都市として莫大な財力を蓄えたニュールンベルクにライヒスヴァルトを売却した。14世紀から15世紀にかけて、帝国自由都市ニュールンベルク市参事会が森林利用と森林保護の両面からライヒスヴァルトを管理することになった。

1450年アンスバッハ辺境伯とニュールンベルク市との間に会戦がおこなわれ、1550年に至るまで、ライヒスヴァルトを財源として利用しようと企てる辺境伯とライヒスヴァルトを継続維持しようと企てる都市ニュールンベルクとの対立が続いた。その後、領邦君主によって委譲されたライヒスヴァルトの管理をニュールンベルク市参事会は誠実に森林継続の観点より400年に渡って実施してきた。

3-3 森林保護と自然景観の維持

中世期すでにライヒスヴァルトは単に経済活動の対象としてのみニュールンベルクの人々によって利用されてきたのではなかった。ローレンツ・ライヒスヴァルトのブッヘンクリンゲン近郊にある「泉」はニュールンベルク市民の遠足目的地であった。伝承資料によると、この泉の傍で「スポーツがおこなわれ踊りがなされ、音楽が奏でられ、パーティが開かれた」という。¹⁷³⁴ 宗教改革者ルターの友人ヨハン・ヘスはブッヘンクリンゲンの泉でラテン語の詩を書いた。その詩は泉の傍の記念碑銅板に永遠に伝えられている。『ブッヘンクリンゲンの泉は最初AD1372年に言及され、ヨハネス・ヘスによって歌われた』と銅板に16

15年記された。その銅板の下にニュールンベルク自由都市の豪商シュトロマイヤーの紋章が石壁にはめこまれていた。ブッヘンクリンゲンの森の継続に貢献したからである。

18世紀初頭に書かれた詩の中に、「ここはその場所、ブッヘンクリンゲンと呼ばれたこの場所で、人々はほんの僅かな金で 食べたり飲んだり踊ったり！」と歌われている。ブッヘンクリンゲンはニュールンベルクの人々が最も好んだ保養地で、その習慣は三十年戦争に至るまで続いた。この泉と銅板と紋章を今日もニュールンベルク動物園から徒歩で約30分の森の中で見ることができる。

ニュールンベルクの人々が余暇におこなったものの中で最も愛好したものは、森での鳥刺しであった。1808年になっても、ライヒスヴァルトには158箇所「おとり場」が残されていた、という。

17世紀になるとライヒスヴァルトは徐々に荒廃していった。帝国自由都市として中世に最も繁栄していたニュールンベルクは帝国自由都市時代末期になると都市自体が没落し、ライヒスヴァルトの管理能力を喪失していった。1618年に始まった三十年戦争も都市衰退の原因の一つであった。1618年の人口が約4万人であったが、戦争終結時の1648年には4分の1に当たる1万人に減少したことは、前述した。200年後の1875年にやっと元の4万人に回復した。1689年から1697年のプファルツ戦争や1701年から1714年のスペイン王位継承戦争は森を含くめ関係した地域に壊滅的な打撃を与えた。1781年になってもまだバイエルン王国では国土の3分の1が荒れ果てたままであった。都市が力を失しなうと、森林管理を委ねられた領邦君主が世襲的に森林管理を継承し、無能な管理と森林への過剰な狩猟と高価な狩猟用動物飼育による樹木への獣害をもたらした。アンスバッハ辺境伯はこのように森林管理を自己の財源の面からのみ実施し、森林の再生と継続を目指すニュールンベルク市民の声は虚しくなっていた。しかしニュールンベルク都市はライヒスヴァルトの荒廃に責任があった。ドイツにおいては、都市が没落すれば、近郊の森も荒廃する、と言える。

ライヒスヴァルトは絶えず保護者を必要としてきた。初期の保護者は神聖ローマ帝国皇帝、次に帝国自由都市ニュールンベルクであった。1697年ライヒスヴァルトに関して「己れ自身を救う者は、必ず己れ自身を新しくする」と述べられたように森は人間という保護者を必要としている。だが残念ながら、常により保護者が与えられるわけではなかったことを歴史が示めている。

18世紀になると、数えられない程多量の狩猟用獣赤鹿が繁殖した。森林を計画的に利用する管理能力のある者は存在せず、家畜用敷わら採集、ピッチ製造、森林内放牧などによって、ライヒスヴァルトは極端に劣悪化した。余りの獣害のひどさに、1796年アンスバッハにあるプロイセン国官庁は赤鹿絶滅を命じた結果、赤鹿1300匹が仕止められた。その中で最大赤鹿の角は15.25kgあり、今日エルバッハ城でそれを見物することができる。

1806年バイエルン王国がニュールンベルク市と共同でライヒスヴァルトを引き継いだ時、ライヒスヴァルトは深刻な状態に陥ちいていたが、森林の再生と継続原理が本格的に実行されることが可能となり、約90年にわたりこの理念に基づく作業が粘り強く続けられ、幾多の挫折を経験しながらも、ほぼ森林の再生に成功した。1820年頃ライヒスヴァルトの面積は約30,617haであった。1892年から1896年の松枝尺蛾虫による虫害でライヒスヴァルトの3分の1に相当する9千haが失われた。それはかのシュトロマイヤー以来500年間継承されてきた針葉樹皆伐経営と200年に及ぶ森林過剰利用の結果であった。

両大戦中及び戦後、ライヒスヴァルトは可能な限度を越えて利用し尽くされたが、前述した戦争直後のイギリスへの答申に示めされた理念に基づき、森林の再生が企てられ、虫害によって喪失した9千haの内、4千haが潤葉樹と針葉樹の混交樹林として再生され今日まで残されている。

3-4 1970年代の自然保護運動に見られる景観継続

ライヒスヴァルト森林面積の変遷を資料として残されている1820年から1970年までを纏

めると以下のようなものである。

1820年30,617ha、1900年までの80年間に680ha減少。

1901年～1918年の第一次大戦前後の18年間に1,218ha減少。

1919年～1932年の第二次大戦前までの14年間に1,202ha減少。

1933年から1945年の第二次大戦中の12年間に2,093ha減少。

1946年から1970年の第二次大戦後の25年間に2,032ha減少。

1970年現在、ニュールンベルク・ライヒスヴァルト総面積は23,394haである。

1820年から現在まで約7千ha、全体の24%が減少したことになる。

19世紀森再生と継続原理が国民的合意を獲得した時代の1820年から1900年の80年間にライヒスヴァルトは僅か680haの森林面積の消滅であったのに対して、1960年から1971年の僅か10年間の森林消滅面積は1,766haに達した。この1,766haを1820年以来のライヒスヴァルト森林消滅総面積7,000haと比較すると、その25%である。151年間の総消滅面積は年間約46.4haに対して、この10年間の年間消滅面積は176.6haで、約3.8倍である。ちなみに1970年を起点にニュールンベルク東営林署管内の10年間森林減少面積は922ha、ニュールンベルク南営林署管内の消滅面積は3年間で300haであった。

1970年代は1960年を遙かに越える開発計画があった。国による天然ガス貯蔵施設造成計画、国及びニュールンベルク市共同による南東アウトバーンアクセス道路設置計画、私企業リンデ商会による炭酸ガス及び窒素ガス生産工場設置計画、住宅産業による宅地造設計画、バイエルン州開発計画、これら全てライヒスヴァルトの森林原野を対象にした開発計画であった。

当時西ドイツ国内で毎年平均7千haの森林が消滅し、その内の80%は人口密集地域での森林開発に起因するものであった。都市近郊の森は高度成長に伴い国、州、市町村行政と開発企業との連合により、地域開発計画を作成する際、最も安価な建設予定地とされてきた。大都市ニュールンベルクを帯状に北部、

東部、そして南部ととり囲むライヒスヴァルトは、1820年来、開墾入植地、産業用地、交通施設用地としてすでに7千haを喪失してきていた。

1966年ライヒスヴァルトは自然景観保護区域に指定されたにも拘らず、60年代の10年間に1,766haが消滅した。これは西ドイツ国内10年間消滅面積の6%を占めていたが、1960年代までには人口密集地に住む人々はライヒスヴァルトへの侵害に対して殆んど抵抗を示していなかった。

1972年ライヒスヴァルトを救えという市民運動が起きた。この自然保護運動はニュールンベルク市民と国家の両方から提供されていた。国家とは18世紀以来森林継続原理を保持してきた山林局関係者たちであり、市民はニュールンベルク市民を主体とするライヒスヴァルト周辺に住む人たちであった。自然保護団体が組織され、その団体はライヒスヴァルトに関する公表された開発プログラム基本綱領に基づいて、それらの計画の責任ある立場の政治家、責任者へ人口密集地近郊森林^{11.35}の役割を根気強く訴えることに成功した。森林継続理念に関する両者の長年にわたる協議と審議の結果、1979年バイエルン州議会はほぼライヒスヴァルトを含む4万6千haに及ぶ都市近郊型森を最初の大都市近郊型保養林として認定した。この議決により、ライヒスヴァルトはバイエルン州森林法によって最高の保全を獲得し、開発伐採ないし森林消滅をもたらす土地利用形態はたとえ森林所有者が公的所有者であっても基本的には禁止されることになった。但しこの議決も、ドイツ連邦、ドイツ鉄道、ドイツ連邦国防軍、ドイツ連邦遠距離道路管理局による国家的プロジェクトは企画しえる可能性を残していた。結果的には1820年から1980年までの森林消滅総面積は6,900ha^{11.36}となった。

ニュールンベルク・ライヒスヴァルトはニュールンベルク市民によって保護維持されたのであった。ちなみに著者は「ライヒスヴァルトを救え」運動が開始された1972年から1975年にかけてニュールンベルク・エルランゲン大学に留学してこの運動を承知していた。

4 ヴァッカーズドルフにおける自然景観保護

ドイツ南東部バイエルン州オーバーファルツ県シュヴァンドルフ郡ヴァッカーズドルフ村があり、この村には樹齢百年を越える赤松の森がある。30キロ東にはチェコ国境がある実に辺りな村である。このヴァッカーズドルフ近郊の州有林170haが原子力再処理工場予定地として州政府によって選ばれると、州政府は時価の4割という安値で核燃料再処理会社に払い下げ、その地区がある村は核燃料再処理工場建設反対のため、当該地区を再処理工場建設賛成のヴァッカーズドルフ村に併せさせ、80万本の赤松樹を伐採し、自然破壊を始めたのであった。ヴァッカーズドルフ村の人口は約3千人で、村長と80%の住民がこの開発計画に賛成したのは、再処理工場より事業税収入があり、核燃料再処理会社が村に体育館を建設し、次々と施設を建てるという理由であった。これに対する反対運動が森を守れという理念に基づいて1983年発足した。ヴァッカーズドルフ村住民の20%は反対であったが、実際に反対運動に参加した者は最初少数であった。その中核になったのはヴァッカーズドルフ村を含め近隣に住む敬虔なカトリック教徒やカトリック神父であった。1983年5月最初の反対デモがおこなわれた。カトリック神父は最初はカトリック教会によって批判された。シュヴァンドルフ郡長は反対運動に参加した。その理由で郡長は州政府から公務員違反と訴えられたが、後には両者ともその周囲から理解されることになった。その後森を守る運動はドイツ全国に拡がり、このヴァッカーズドルフの森は我々の森であり、この森を破壊されるのは困ると言う人々が全国からヴァッカーズドルフ村に集まってきた。シュヴァンドルフ郡長は反対運動の先頭に立った。カトリック神父は多くの支持者を全国から獲得した。州政府は数多くの公聴会、諮問委員会、協議会を開催し、住民、反対者、賛成者の意見を発表する機会を与えた。1988年公聴会において、物理学者カール・ワイツゼッカーは「核エネルギーそのものの可能性については否定しない。しかしこのような再処理工場は無理

である。」と発言した。同じ年ワイツゼッカーは化学者アルミン・ヴァイス等と共同で原子力法異議申し立てをおこなった。1989年4月州政府は核燃料再処理工場建設計画を断念することを発表した。

このヴァッカーズドルフの核燃料再処理工場建設反対運動は、そもそもレーゲンスブルクの森伐採に対する反対運動が核になって生まれたものである。1972年のニュールンベルク・ライヒスヴァルトを守る運動は、バイエルン州の森を守る運動でもあった。レーゲンスブルクはニュールンベルクから南東へ約100キロにある同じバイエルン州に属する古代ローマ時代から古都である。レーゲンスブルクは700年の伝統を持つ神聖ローマ帝国王朝ハプスブルク家の所領であった。レーゲンスブルクの森伐採反対運動をハプスブルク家の継承者オットー・フォン・ハプスブルクは支持した。その森を守る運動があるレーゲンスブルクはヴァッカーズドルフの南40キロに位置している。ヴァッカーズドルフの森には、150年以前からあるという「森の守り神」の十字架、ロートクロイツと呼ばれる赤い十字架がある。この十字架は反対運動のための十字架ではなく、森を守る十字架であり、この土地の守護神であった。森の再生と森の継続の理念はニュールンベルクからレーゲンスブルクへ、レーゲンスブルクからヴァッカーズドルフへ、そしてヴァッカーズドルフから再びドイツ全国へと継承されていった。

参考文献

1. カール・ハーゼル著山縣光晶訳 森が語るドイツの歴史 築地書館 1996年 p.229~230
2. Tacitus, Germania. Lateinisch und Deutsch. Übersetzt, erläutert und mit einem Nachwort hrsg. von M.Fuhrmann, Stuttgart, 1972.
藤本武著 古代ゲルマン語 'Wald' への宗教史的視点 I、新潟青陵女子短期大学研究報告 第27号 1997年所録 p.79
3. Küster, Hansjörg., Geschichte des Waldes. Von der Urzeit bis zur Gegenwart. Verlag C. H. Beck, München 1995. S.93-100.
Küster, Hans., The economic use of Abies wood as Timber in Central Europa during Roman Times. Vegetation History and Archeobotany. 3. 1994. p.25~32. 参照
4. モンテスキューはある意味では古典的哲学者の最後の人であり、またある意味で社会学者の最初の人である。彼は政治的自由に力点を置いて、自由主義的政治観を示めた。
5. 前掲書 Küster, Geschichte des Waldes. S.181参照
6. 前掲書 Küster, Geschichte des Waldes. S.171参照
7. ドイツ・ロマン派詩人。近代詩の先駆者。作品に『メシアス』など。
8. タキトウスは西ゲルマン人をイングヴェーオン族、ヘルミノース族とイストヴェーオン族の三部族に分けている。イストヴェーオン族はライン右岸に住んでいた。タキトウスによれば、ヘルミノース族は有史以前ゲルマニア中央に住んでいたヘルミノース族の子孫と見られている。
9. オートリュソー, J.A., 著 沢崎浩平訳<アウフクレールング>、ロマン主義 西洋哲学の知 IV巻 啓蒙時代の哲学所録 白水社 1998年 p.148~149
10. ゲルマン部族の一つヒエルスカー人。紀元前18年頃生まれ、人質としてローマに捕らえられ、ローマ軍に仕える。ローマ名アルミニウス。後にゲルマニアに帰り、ゲルマン民族連合軍をひきいて、ローマ軍と戦い、紀元後9年ローマ大軍を破った。後年王位に即位しようとしたかどで部下に毒殺された。

11. 三連作は、1769年『ヘルマンの戦い』、84年『ヘルマンと諸侯』、87年に『ヘルマンの死』である。
12. クライストの『ヘルマンの戦い』はナポレオンに対するドイツ人の奮起を促した愛国的戯曲であった。クライストはドイツ・ロマン派劇作家、作品に『こわれがめ』などがある。最後はピストル自殺を企てた。
13. ゲルマン神話伝説の英雄、ニューベルンゲンの歌にも登場する。
14. 前掲書 Küster, Geschichte des Waldes.S.183.
15. 藤本武著 1812年と1815年に出版された『初版グリム童話』を中心にして16、17世紀のヴァルトとフォルストに関する宗教史的視点 新潟青陵女子短期大学研究報告 第29号所録 1999年 p. 6～8
16. 前掲書 Küster, Geschichte des Waldes.S.181.
17. 前掲書 拙書 宗教史的視点I p.77～82
18. ドイツ愛国詩人 対ナポレオン解放戦争に出征して戦死。作品は『堅琴と剣』など。
19. 前掲書 Küster, Geschichte des Waldes.S.183.
20. Sins, G.,Die Baumschulen des Rheinlandes mit besonderer Betonung der Verhältnisse in Meckenheim Arbeiten zur Rheinischen Landeskunde 4, Bonn 1953.
21. 前掲書 ハーゼル著 ドイツの歴史 p.233
22. Cotta,H.,Grundriß der Forstwissenschaft. 3.Auflage,Dresden und Leipzig,1843
23. 前掲書 Cotta Grundriß der Forstwissenschaft. 参照
前掲書 ハーゼル著 ドイツの歴史 p.239～240
前掲書 Küster.Geschichte des Waldes.S.185.
24. Kronfeld,E.M.,Der Weihnachtsbaum,Botanik und Geschichte des Weihnachtgrüns.Seine Beziehungen zu Volks glauben,Mythos, Kulturgeschichte,Sage,Sitte und Dichtung. Oldenburg und Leipzig,o.J.Schneider,C.,Der Weihnachtsbaum und seine Heimat,das Elsaß .Zweite,durchgeschene und erweiterte Auflage,Dornach,1977.
25. Bruckhard,H.,Säen und Pflanzen nach forstlichen Praxis.Ein Beitrag zur Holzziehung.Hannover.1855.
26. Salisch,H.von.,Forstästhetik.3.Auflage, Berlin.1911.
27. Seltner,B.,Waldnutzung und ländliche Ggesellschaft.Landwirtschaftlicher,“Nährwald” und nene Holzökonomie im Sauerland des 18.und 19.Jahrhunderts.Forschungen zur Religiongeschichte 13,Paderborn 1995.
28. Wenzel,I.,Ödlandentstehung und Wiederaufforstung in der Zentralfifel.Arbeiten zur Rheinischen Landeskunde.18.Bonn 1962.
29. Kahlert,H.,300Jahre Schwarzwälder Uhrenindustrie.Gernsbach 1986.
- 30.前掲書 Küster Geschichte des Waldes S.220—221.
31. Hoffmann,P.,Widerstand,Staatsstreich, Attentat.Der Kampf der Opposition gegen Hitler.Müncheu,1969.
32. Sperber,Der Reichswald bei Nürnberg Ansbach,1912.Sperber.,Der Reichswald bei Nürnberg in Mitteilungen aus der Staatsforstverwaltung Bayerns hrsg.von Bayerischer Staatsministerium für Ernährung Landwirtschaft und Forsten.37Heft.Frankenverlag Lorenz Spindler Nürnberg.
33. アルトドルフ営林署所在地は、Bayer.Forstamt Altdorf 90518 Altdorf b.Nbg.,Bahnhofstr. 18.1055.
34. Der Nürnberger Reichswald Hrsg.von Hartmann und Hubert Weiger,Vevlag Hans Cavl Nürnberg,1980.S.23.
35. Weinzierl,H.,Die andere Wähung.in “Der Nürnberger Reichswald”S.62—65.
36. Weiger,H.,Reichs wald programm 1980.in“Der Nürnberger Reichswald” S73—74. Im Reichswald hrsg.von Gundrum Vollmuth,Verlag Walter E.Keller 1993を参照。
37. 広瀬隆・橋口讓二著 ドイツの森番たち 集英社 1994年 p.157—197.